

天孫降臨の地とおのころ島の発見

長谷川 彰 hasegawa@msb.biglobe.ne.jp

参考 URL <http://w312.k.fiw-web.net/hscp/>

★はじめに

今回は日本神話にある天孫降臨の地と記紀にあるおのころ島（日本書紀）またはおのころ島（古事記）の発見について書きます。まず、神話にある天孫降臨は「天孫の邇邇藝命（ににぎのみこと）が、天照大神の神勅を受けて葦原の中つ國を治めるために高天原から日向国の高千穂峰へ天降に降り立ったこと」とされているので、ここから天孫降臨の地は高千穂峰（宮崎県高原町大字蒲牟田）であることは誰でも連想することができます。この考えは高千穂峰が霧島連峰にあることから「霧島高千穂説」と呼ばれています。一方、宮崎県臼杵郡高千穂町に高千穂の地名があり、こちらが天孫降臨の地であるとする「臼杵高千穂説」もあって、江戸時代はこの二つの説が大きな論争になりました。しかし、近年は両者の説を否定する意見が多くなり、例えば古田武彦氏は天孫降臨地を「盗まれた神話 ミネルバ書房」で博多湾岸と糸島郡との間、高祖山を中心とする連山こそ、問題の「天孫降臨の地」であると断定しています。また古田武彦氏と熾烈な争いをしてきた安本美典氏は天孫降臨地を宮崎県西臼杵郡高千穂町として、その後霧島山に移動したとの説を取っていて、どちらも「霧島高千穂説」を否定しています。さらに、古代氏族の研究から古代史を明かそうとしている宝賀寿男氏も「日向」の意味を古田武彦先生と同じように解釈し、やはり「霧島高千穂説」を否定しています。

ここで、大発見がありました。これまで、神社の始まりをHSCPによって見つけることができなかつた努力が来ましたが、最初は佐渡の長者ヶ原遺跡、島根の最上位経王大菩薩、対馬の本宮神社、はては北海道礼文島の知床稲荷神社と多くの候補地を上げてきました。しかし、どのポイントの神社群中心も古富士ポイントを指していることが悩みの種になり、その判断ができない状態でした。ところが、伊豆の手石の弥陀ノ岩屋位置が神社群中心の位置にあることから、芋づる式に長崎県五島列島の北部、斑島（小値賀島の属島）の玉石鼻にある玉石甌穴が神社群中心であることがわかりました。さらに、この神社群中心から伸びたHSCP線から、天孫降臨の地が高千穂峰であることを明確に証明することができました。また、玉石甌穴のある斑島は記紀にあるおのころ島またはおのころ島に相当することもわかってきました。

★神社群中心、手石の弥陀ノ岩屋の発見と玉石甌穴の発見

全国のHSCP線を引いている中で静岡県伊豆半島南部のHSCP線が、どうしても納得のいかないままに残っていることが気になっていました。しかし、6月には北海道に調査旅行に行ったこともあり、その後は北海道の縄文遺跡と神社の関係にばかりきりになっていました。ところが、偶然の契機で北海道から遠く離れた伊豆半島の南部のHSCP線を引くことになり、ここで手石の弥陀ノ岩屋が神社群中心であることを発見しました。この発見によって、伊豆半島南部のHSCP結線が納得のいく状況になると同時に、次の大きな発見につながって行きます。

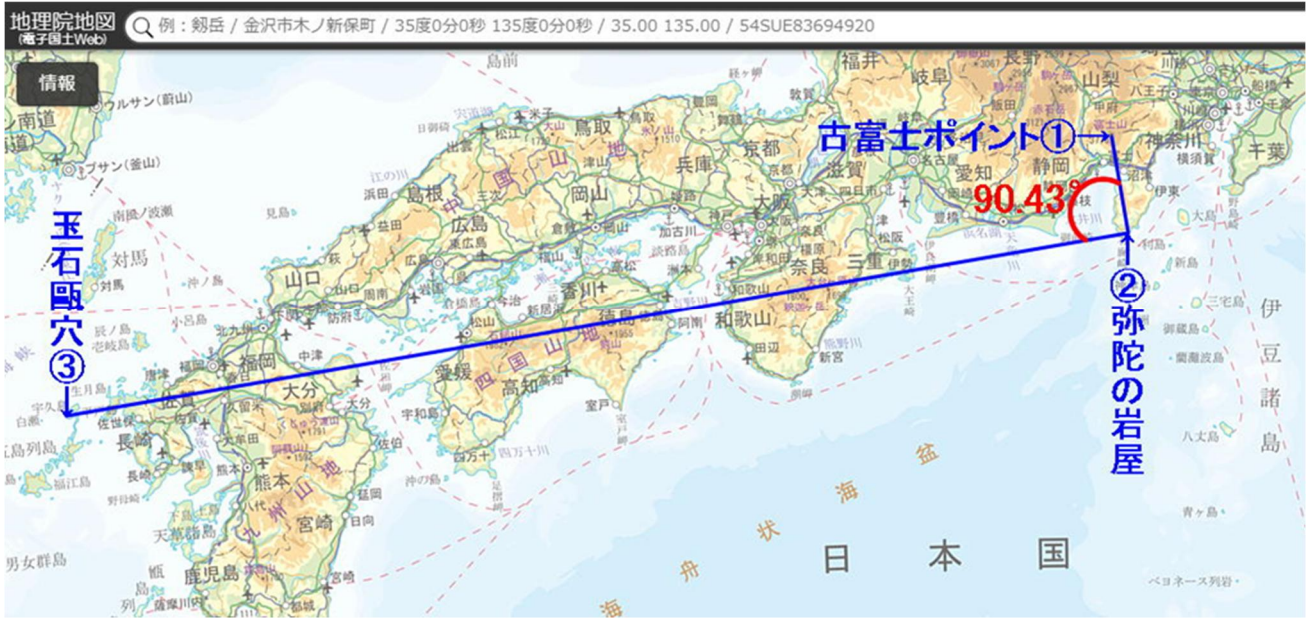
手石の弥陀ノ岩屋は静岡県賀茂郡南伊豆町手石にある海蝕洞窟です。大潮で波の静かな晴天の日の正午頃、この洞窟に入ると、暗闇の中に金色に輝く三体の仏像が現れると言われていて『手石の弥陀ノ岩屋』として天然記念物として登録されています。実際は、洞窟の奥に、鳩穴と呼ばれる小さな穴が天井にあり、天井から差し込む光が洞内を照らすことによって道内の岸壁が阿弥陀のように見える状況になっています。

古代人もこのような現象を神聖なものとして、このポイントを重要な聖地として神社群中心にしたに違いありません。



写真 1

このポイントが重要なことは図 1 に示すように、①古富士ポイントから②弥陀の岩屋を経由した直角線が五島列島の斑島にある□玉石甌穴に 90.43° の補正内角で到達することです。古代人がそんなに遠く的位置を正確に認識していたことに、ほとんどの人は信じられないでしょう。しかし、これが真実である証拠を示して行きます。



	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度経度	補正内角 度
出発	①古富士ポイント	静岡県御殿場市	352100.83	1384425.37	35.350230,138.740380	
経由	②弥陀の岩屋	静岡県賀茂郡南伊豆町手石	343734.24	1385324.33	34.626179,138.890091	90.43
到着	③斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町斑島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	

図 1 ①古富士ポイントを出た線は②弥陀の岩屋を経由して 90.43° (補正内角) で玉石甌穴に到着する

さて、ここでこのような配列はいつ考えられたのでしょうか。それが通常考えられる時期よりも非常に古い時期であることを示したものが図2です。図1で②弥陀の岩屋から①古富士ポイントに伸びた線をさらに延長すると縄文遺跡である長者ヶ平遺跡に到着します。②弥陀の岩屋から①古富士ポイントに延ばした線と⑦長者ヶ平遺跡に延ばした線はほとんど同じ角度になり、図1、図2からも読み取れるように 0.06° の差しかありません。これは古代人が同じものとして設定したものと考えられます。

ここでは省略していますが、①古富士ポイントから⑦長者ヶ平遺跡までの線分に対して、博士山(福島県柳津町大字大成)がピギーバック点になり、その補正内角は 89.89° になっています。「博士」は古代では基準の意味があり、宮大工は最近までこの言葉を使っていました。ここでも、長者ヶ原遺跡から古富士ポイントまで届き、その後②弥陀の岩屋から③玉石甌穴に届く重要な線となっています。

陸奥国二宮である伊佐須美神社(福島県大沼郡会津美里町字宮林甲 4377)縁起では、「紀元前 88 年(崇神天皇 10 年)、四道將軍大毘古命と建沼河別命の親子が蝦夷を平定するため北陸道と東海道の派遣された折、出会った土地を「会津」と名付け、天津岳(御神楽岳)山頂に国土開拓の祖神としてイザナギ、イザナミニ神を祀り、その後御神楽岳山頂に鎮座していた神社は、博士山、明神ヶ岳を経て、現在の会津美里町内に遷座されたる。」と書かれています。ここから見ても図2の配列が考えられた時期は少なくとも紀元前であることがわかります。

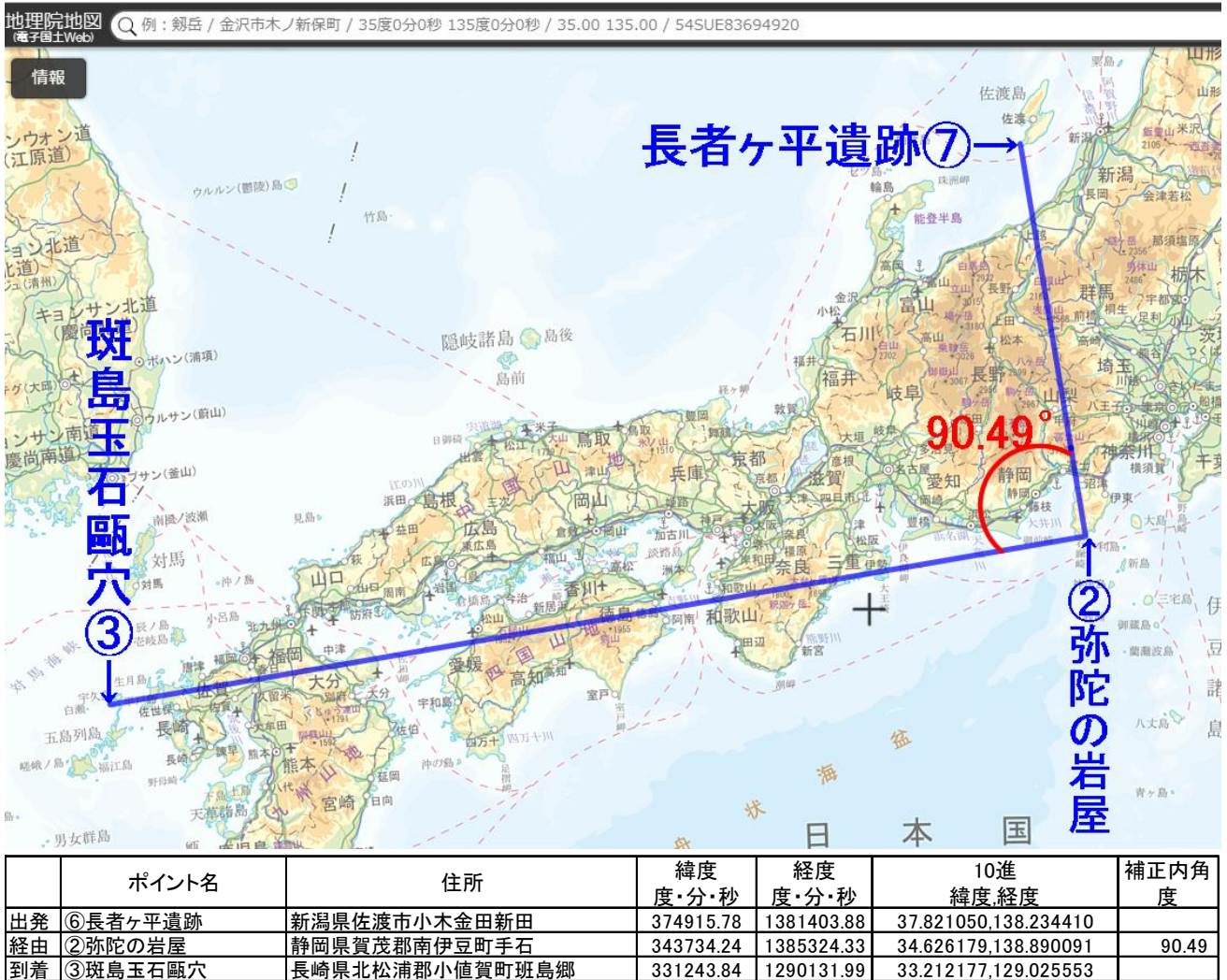


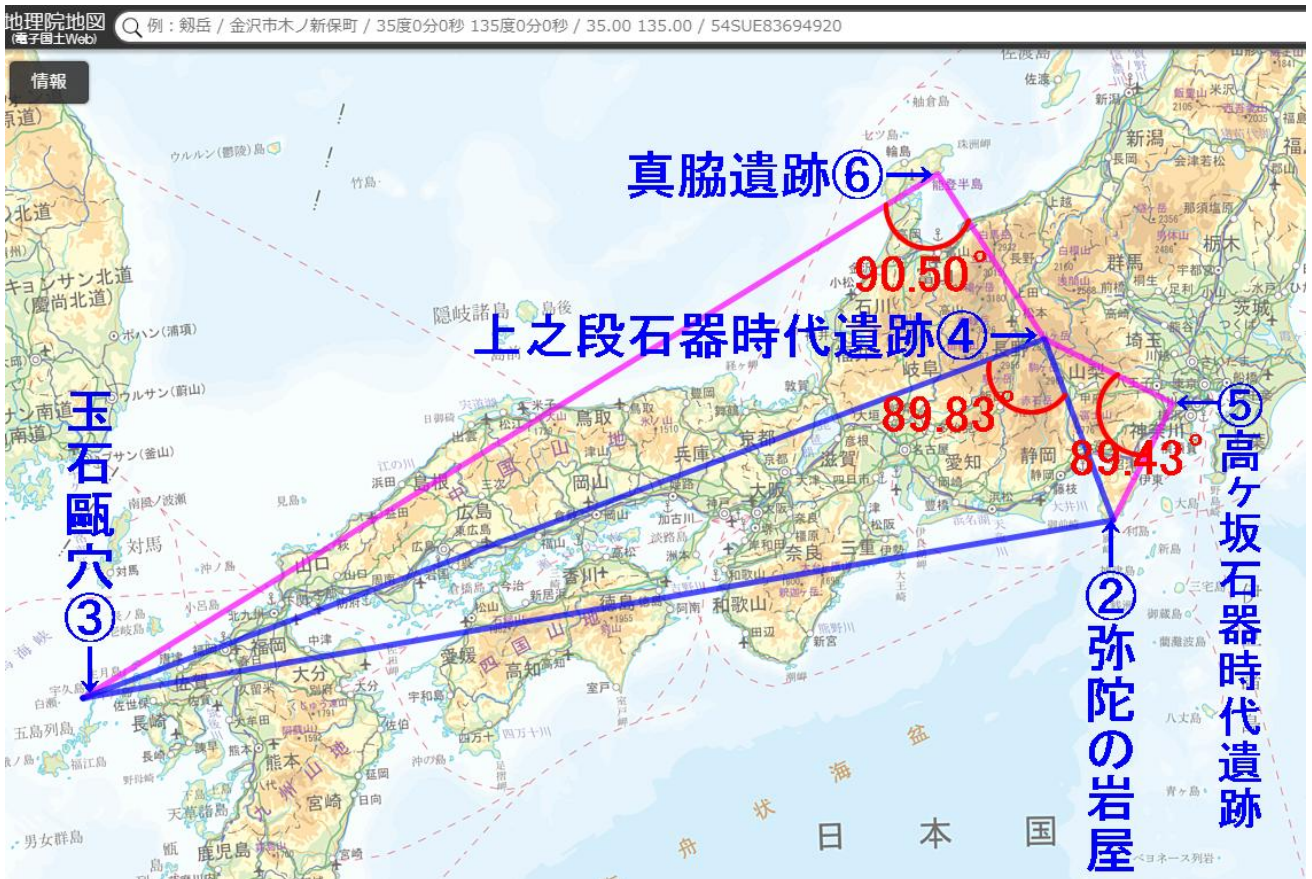
図2 ②弥陀の岩屋を経由する⑥長者ヶ平遺跡から③玉石甌穴に到着する直角線

図1や図2では弥陀の岩屋から③玉石甌穴までの距離は約 900 km もあります。古代人がこのような遠距離の方向が

わかるわけはあるまいと思う人は多く、たまたま辻褃を合わせるように線を引いたに過ぎないと考えてしまう人もいるでしょう。しかし、次の説明でこの線に重要な意味が含まれていることを知ったらさぞかし驚くにちがいありません。

図3は□弥陀の岩屋から□上之段石器時代遺跡を經由して89.83°の直角線が□玉石甌穴に到着しています。この様子を青色線②-③-④の三角形で示しています。④上之段石器時代遺跡は扁平な川原石を敷き詰めた遺跡で□高ヶ坂石器時代遺跡と同じ様式の遺跡です。

ここでさらに驚く配置があります。図2の青線で示した②-③-④の三角形にある線分②-④、④-③に対してもピギーバック点があることです。



	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度・経度	補正内角 度
出発	②弥陀の岩屋	静岡県賀茂郡南伊豆町手石	343734.24	1385324.33	34.626179,138.890091	
経由	④上之段石器時代遺跡	長野県茅野市北山湯川	360234.90	1381332.12	36.043029,138.225590	89.83
到着	③斑島玉石甌穴(新)	長崎県北松浦郡小値賀町班島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	
	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度・経度	補正内角 度
出発	④上之段石器時代遺跡	長野県茅野市北山湯川	360234.90	1381332.12	36.043029,138.225590	
経由	⑤高ヶ坂石器時代遺跡	東京都町田市高ヶ坂2丁目43	353223.41	1392724.18	35.539835,139.456718	89.43
到着	②弥陀の岩屋	静岡県賀茂郡南伊豆町手石	343734.24	1385324.33	34.626179,138.890091	
	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度・経度	補正内角 度
出発	④上之段石器時代遺跡	長野県茅野市北山湯川	360234.90	1381332.12	36.043029,138.225590	
経由	⑧真脇遺跡	石川県鳳珠郡能登町字真脇	371820.38	1371225.02	37.305660,137.206950	90.50
到着	③斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町班島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	

図3 線分②-③に対するピギーバック点④、さらに線分③-④、②-④にもそれぞれピギーバック点があるそれは、図2の桃色線で示した三角形の頂点がピギーバック点で、線分②-④に対しては⑤高ヶ坂石器時代遺跡（三つある中の半場遺跡）、線分④-③に対しては⑥の真脇遺跡になります。



写真2 ⑤高ヶ坂石器時代遺跡

ここで、⑤高ヶ坂石器時代遺跡は写真2にあるように、扁平な川原石を敷き詰めた配石遺構で、関東に多い遺跡です。④上之段石器時代遺跡も同じ様式の遺跡で、敷石を敷き詰めた中に炉と呼ばれてきた穴があることで、住居跡とされてきたものです。このような意見に対して、敷石を敷き詰めた配石遺構は住居跡ではないと以前から主張してきました。ここでもその位置の特異性から単なる住居跡ではないことがわかります。⑤高ヶ坂石器時代遺跡は自宅から直線距離で 2.6km ほどの距離の徒歩距離にあります。

④上之段石器時代遺跡は⑤高ヶ坂石器時代遺跡と同じ敷石遺跡です。この遺跡は住居跡とされ、埋め戻した遺跡の上に古代の住居を再現したようなものが建ててあり、敷石そのものは見る事ができません。⑤高ヶ坂石器時代遺跡はガラス窓の付いた覆い屋根で保護されていて、発掘時の様子を硝子越しで見ることが可能です。

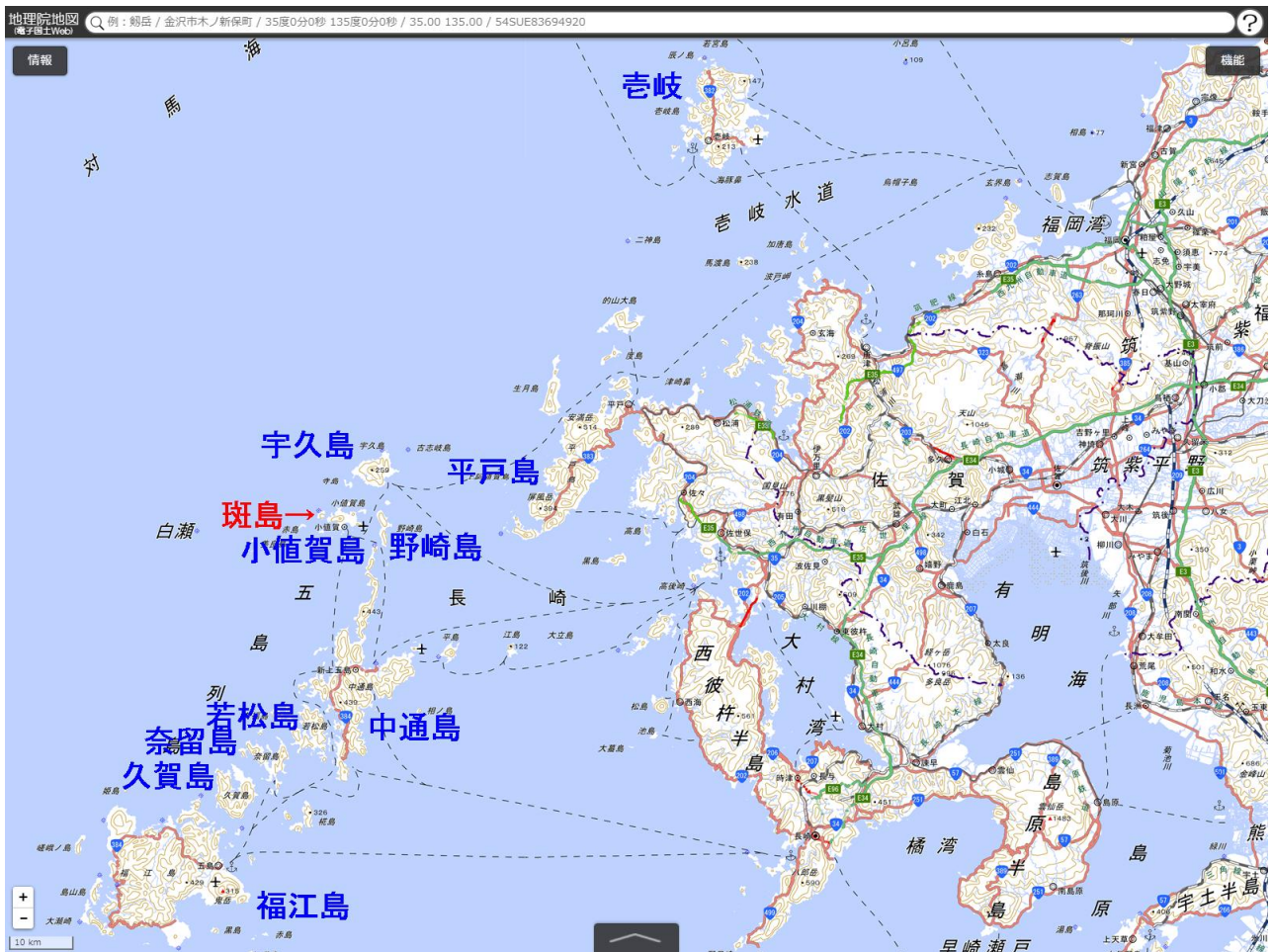


図4 斑島の位置 (赤字)

⑥真脇遺跡は国内では最大の環状木柱列です、ここで使用されている木柱は半裁された栗の大木を使用した極めて珍しいものです。このような特異な木柱列はほかに例がありません。規模は小さいながらも、これに似た例として円形状の木柱列はチカモリ遺跡、桜町遺跡の二つだけで他に例のない珍しいものです。図1や図2に示すように、これらの図にある線の端点にはまだ神社がありません。これは、神社がHSCP規則で全国に配置される以前の配列であると考えています。

これまで書いた、直角線の到着点である玉石甌穴（たまいしおうけつ）は図3の赤色文字で示した五島列島の斑島（小値賀島の属島）にあります。斑島での位置は図4に示すように斑島の北東端の玉石鼻と呼ばれる海岸にあり、その穴の真上から見たものを写真3で示しました。



図4 玉石甌穴の位置



写真3 玉石甌穴（真上から）撮影 2017.11.17

撮影した日は曇りで、波の無い日でしたから、肝心の甌穴は乾いていましたが、波があると、甌穴まで波の飛沫がきて甌穴の中が濡れ、玉が光って見えます。この甌穴は41万年前に噴火で流出した玄武岩の隙間に落ちた礫が波で回転しているうちに穴も礫も摩耗して、このような姿になったものです。穴の直径は80~90cm、円礫の直径は40cmほどで日本では最大、世界でも2番目の大きさだそうです。この甌穴は現在でも満潮になると岩の割れ目に海水が侵入し、海水の動きによって円礫が回転し摩耗を続けているようです。神話の世界でイザナギ、イザナミがここから生まれたのもわかるでしょう。古事記にある「塩こをろこをろ」の難問も海水でこの礫が回転する音とすると解決します。

この甌穴の真上をGPS（Garmin GPSMAP64S、みちびき対応）で測定してきました。その位置は
北緯 33度12分43秒84 東経 129度01分31秒99でした、

しかし、国土地理院の地図では

33度12分45秒11 129度01分28秒.64

となっていて、120mも東南東にずれた点にありました。このずれを国土地理院に連絡したところ、その事実を認め次の更新時には正しい値に修正するとの返事がありました。

図1や図2に書かれた端点は、どれも珍しい場所で、神社のように数は多くはありません。このような珍しい点が規則的に定まった位置にあることはこの配列が計画的に行われていた証拠であることは確率論を持ち出すまでもなく理解できるでしょう。

②弥陀の岩屋の位置は、縄文遺跡だけでなく、鉱石を産出する鉱山の位置とも関係する不思議な関係もあり、このような神社の配列を考えた人たちが、鉱石を採掘する外国人である可能性を持っています。その一部の説明は図6で説明することにしてこれを省略して次に行きます。

★記紀にあるおのころ島、おのころ島は斑島

日本の国生み神話の中でイザナギ、イザナミの生まれた島として日本書紀では礮取慮島（おのころじま）、古事記では淤能碁呂島（おのころじま）とされている島です。この島がどこにあるかは、これまで謎とされてきました。その候補地としては沼島（兵庫県南あわじ市沼島）、神島（和歌山県和歌山市加太、友ヶ島の属島）、絵島（兵庫県淡路市岩屋）、自凝島神社（兵庫県南あわじ市榎列下幡多415）、十神山（島根県安来市安来町）、家島（兵庫県姫路市家島町宮）、鳴門海峡の飛鳥など、はては地球そのものであるなど、たくさんの候補が上がっています。しかし、そのどこも決定的な証拠がなく、実際にはない架空の島だとの説までありました。

古事記の天地開闢編には下記のように淤能碁呂島に関しては次のように書かれています。『ここに天つ神諸の命もちて、伊邪耶岐命・伊邪耶美命二柱の神に「このただよへる国う修め理り固め成せ」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。かれ、二柱の神**天の浮橋**に立たして、その沼矛を指し下ろして画きたまへば、塩**こをろこをろ**に画き鳴して引き上げたまふ時、その矛の未より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。これ淤能碁呂島なり。その島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。』

古代史研究家の古田武彦氏は上記文書の赤字部分の解釈に苦心されていたときがありました。そして、「こをろこをろ」を「銅鐸の紐に紐をつけて引きずったときの音である」とした奇抜な考えをしているときがありました。その後も「こおろこおろ」をうまく説明できないままで終わってしまいました。もちろん、他の歴史家もこれをうまく説明することはできていませんでした。ここで、「こをろこをろ」は玉石甌穴の中で丸い礫が回転している音とするとぴったりです。

また、淤能碁呂島の名前については「記紀の地名説話で話の筋にあわせて地名を創作した」そのような形跡はほとんど認めることがない。しかるに、「現存地名をもとにして、それと音の似た、あるいはゴロあわせでこじつけた説話を創作する」のが常道だとして能古島（福岡県福岡市西区能古）が淤能碁呂島であるとした考えを持っていました。その理由は、能古島の古名は「能許」であることから、「才」は地名接頭辞、「口」は地名接尾辞とするとノコの島となり、淤能碁呂島＝能古島としています。

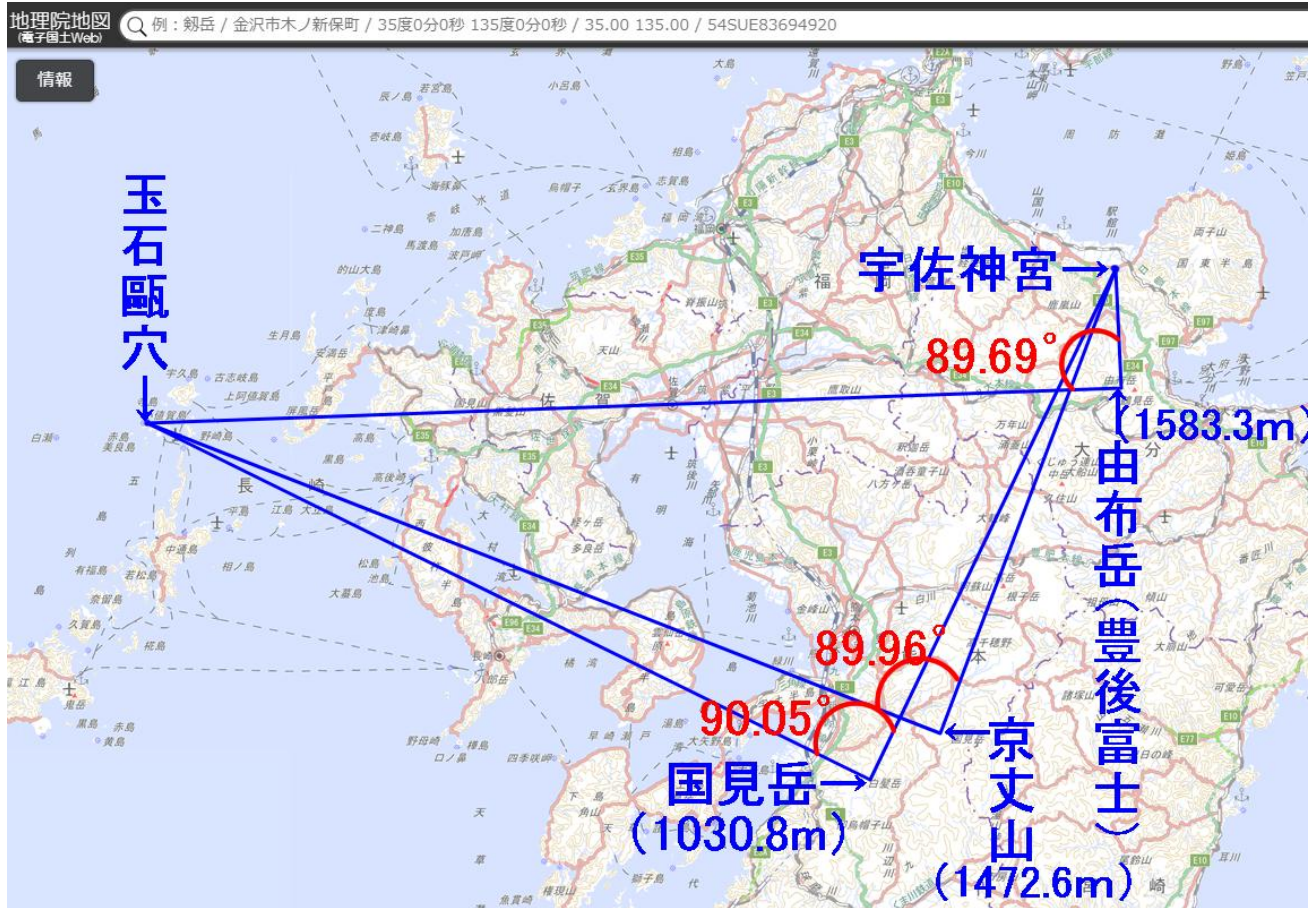
ここで、図4を見てわかるように、玉石甌穴のある斑島と小値賀島の間は290m（昭和53年に斑大橋ができた）この間を筏でつないで天の浮橋を作ったと最初は考えました。ところがこの海峡は潮の流れが早く、とても筏でつなぐことなど不可能であることがわかりました。ところが、現地に行って新しいことがわかりました。かつて小値賀島は小近（おちか）島と大近（おおちか）島の二つの島が狭い海峡で二つに分かれていたのです。鎌倉時代にこの二つの間を埋め立て現在のように一つの島にしたのです。建武元年（1334）に埋め立てが終了この海峡は「建武新田」に生まれ変わりました。その時荷運びなどに使われた牛が多数犠牲となりました。それを供養するための「牛の塔」が建てられています。

古事記では大八島を産んだ後、吉備児島・小豆島・大島・女島・知訶島・両児島を産んだことになっています。すなわち、イザナミ・イザナギが生んだ最後の島の名は両児島です。古田武彦氏は、これを知らず、両児島は沖ノ島とそこから50kmほど離れた小屋島だと断定しています。しかし面積が50倍も異なる二つの島を両児島と呼ぶのはあまりにも不自然です。両児島と呼ぶにふさわしい島、それはかつて二つに分かれていた小値賀島だったのです。そして、その二つの島を結ぶ筏で作った橋、それが「天の浮橋」です。埋め立ても可能であった狭い海峡、そこに筏を繋いで作った「天の浮橋」があったことは容易に考えられます。そして、イザナギ、イザナミの生まれた島はすばり斑島、二人が生まれた場所は「玉石甌穴」それは写真3を見れば一目瞭然です。

ここまで書いたことは、これまで諸説あった礮取慮島論争に終止符を打つ内容を持っていますが、この後さらに驚くことが続きます。礮取慮島であると断定した玉石甌穴の位置が、これまで誰も明かしたことがない天孫降臨の論争にも終止符を打つこととなります。

★日本で最初の神社は宇佐神宮

図5は宇佐神宮と斑島の玉石甌穴、それを直角線で結ぶ山岳（由布岳、京文山、国見岳）を示したものです。



	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度・経度	補正内角 度
出発	宇佐神宮	大分県宇佐市大字南宇佐	333124.52	1312237.82	33.523477,131.377172	
経由	由布岳	大分県由布市湯布院町川上	331656.22	1312324.95	33.282282,131.390264	89.69
到着	斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町斑島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度・経度	補正内角 度
出発	宇佐神宮	大分県宇佐市大字南宇佐	332520.75	1311953.60	33.422431,131.331556	
経由	京文山	熊本県山都町目丸	323446.34	1305702.69	32.579538,130.950747	89.96
到着	斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町斑島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度・経度	補正内角 度
出発	宇佐神宮	大分県宇佐市大字南宇佐	333124.52	1312237.82	33.523477,131.377172	
経由	国見岳	熊本県八代市東陽町河俣(杜島野)	322901.29	1304654.82	32.483692,130.781894	90.05
到着	斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町斑島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	

図5 玉石甌穴を出た線は由布岳、京文山、国見岳それぞれの頂上を経由して正確な直角で宇佐神宮に到達

玉石甌穴を出発した線は、各山岳の頂上を経由して極めて正確な直角で宇佐神宮に到着しています。国見岳を経由している直角線の内角は 90.05 度と極めて直角に近い高い精度になっています。このような精度の直角が偶然に起きる大雑把な確率は 1/2,000 でこの事象一つだけ取っても極めて珍しい事象です。九州本土の山岳は比較的低く、1,000m を超える標高の山岳はそんなに多くない状況下で 1,000m を超える三つの山岳が正確な直角の経由点があることは、偶然では決してあり得ないことです。宇佐神宮の位置は玉石甌穴と三つの山岳の頂上の位置を考慮して計画的に決められていたとしか考えようがありません。これは宇佐神宮の位置を決めた古代人が優れた地理感を持つと同時に、極めて正確に方

向を知ることができたことも意味しています。宇佐神宮は宇佐八幡とも呼ばれ全国で 44,000 社近くある八幡神社の総本社でもあります。宇佐神宮はこの名に恥じない生まれを持っていると考えられます。その理由は、図 5 にはまだ宇佐神宮以外の神社がありません。図 1～3 もまだ神社がありません。これは神社がこれから作られる直前の姿を示していると考えます。とすると、**始めて位置が決まった神社は宇佐神宮になります**。この宇佐神宮の由緒によると 725 年(神亀 2 年)現在の地に造立されたことになっています。しかし、このとき始めて神社ができたわけではありません。図 2～図 3 にあるように、その端点に④上之段石器時代遺跡、⑤高ヶ坂石器時代遺跡、⑥真脇遺跡、⑦長者ヶ平遺跡などの縄文遺跡を含むことから、その位置が決まったのは縄文時代と考えられます。**日本書紀にはそれが書かれていて、八幡様を祀る以前は神代から祀っていた地主神である比売大神を祀っていたと書かれています**。そうです。725 年に八幡様を祀るはるか以前からこの場所に神社があったのです。宇佐神宮ができてから、次にどのように神社ができて行ったかを知るには次の図が参考になります。ここでは、九州から遠く離れた弥陀の岩屋と古富士ポイントの位置が重要になってきます。

★九州の三大八幡宮・三女神を祀る宗像大社すべての位置の謎を解明

九州の三大八幡宮を上げるといくつかの取り上げ方がありますが、ここではその三社として、八幡宮の起源と言われている宇佐神宮、筥八幡宮とその元社と言われている大分(だいぶん)八幡宮の三社を取り上げました。

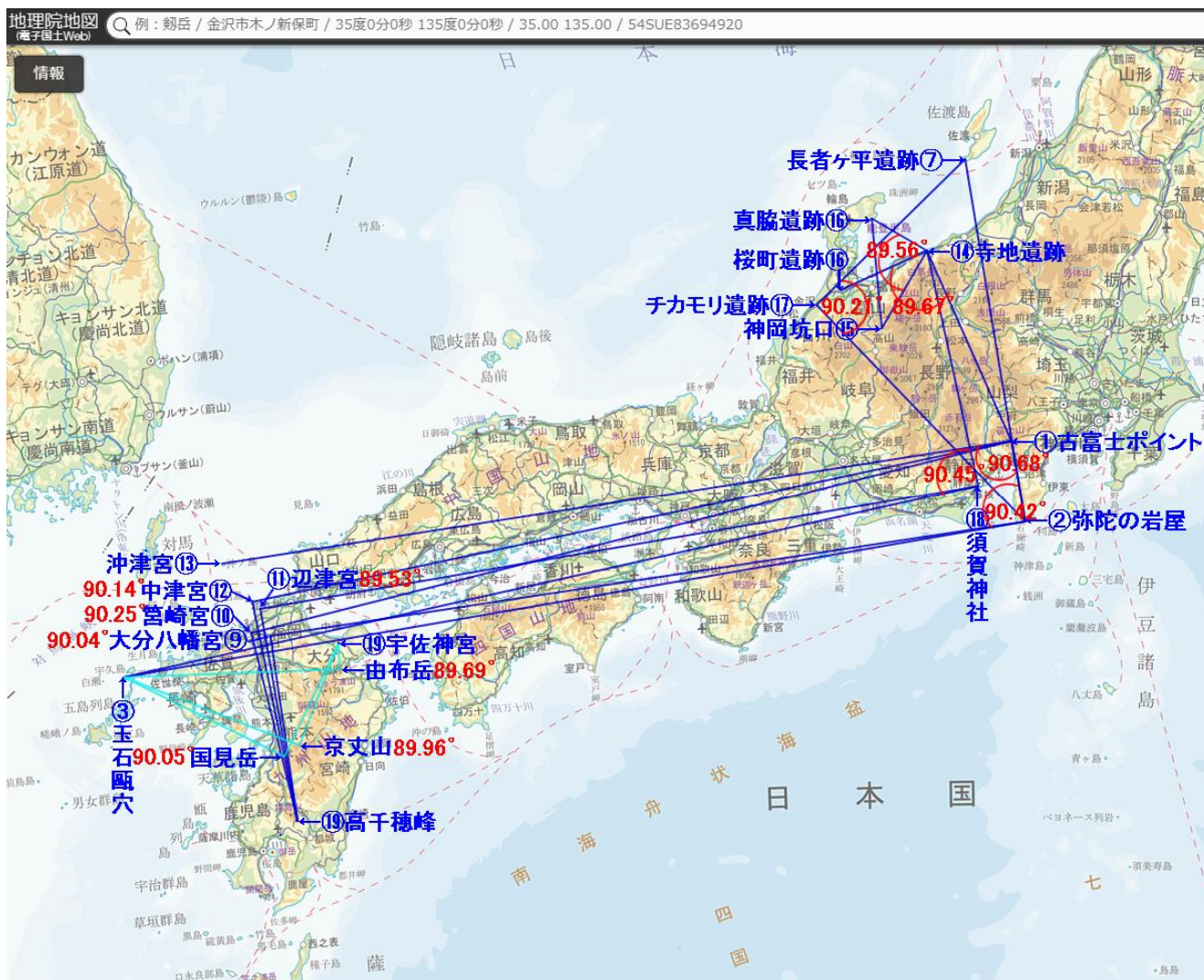


図 6 九州三大八幡宮と宗像大社の位置が古富士ポイント、弥陀の岩屋、玉石甌穴、高千穂神社の位置で決まる

宗像大社の辺津宮、中津宮、沖津宮は共に世界遺産に指定されています。当初、主に韓国が主張している意見で、沖ノ島の沖津宮とその島の周辺にある岩礁だけを世界遺産にして、他の宗像大社である辺津宮、中津宮を除くように勧告していました。中津宮と辺津宮を外す理由として、「自然崇拜に基づく古代の沖ノ島信仰と現在の宗像大社信仰に、継続性は確認できない。」との指摘もありましたが、インドネシアの主張である「沖ノ島（沖津宮）と中津宮および本土の辺津宮（宗像本社）は全体的に融合しており不可欠だ」とした意見などが認められ、残りの宗像三社である辺津宮、中津宮まで含んで今年の7月世界遺産に登録された経緯もあります。

ところが、日本の神社の始まりを見ると、次のような経過で日本の神社ができて来た経緯がわかります。ここには、宗像大社だけでなく、九州の宇佐八幡宮と大分八幡宮、筥崎宮などの三つの八幡宮と、これまで誰も注目していなかった須賀神社（静岡県静岡市駿河区東新田1-16-12）、弥陀の岩屋と古富士ポイントに加えて環状木柱列などの縄文遺跡なども関係しながら神社が作られてきたことがわかります。

1.まず図5で示すように、玉石甌穴から、由布岳、京丈山、国見岳三山の頂上を経由した直角線の収斂する特異点に宇佐八幡宮の位置が定まります。

2.次に、佐渡にある長者ヶ原遺跡から古富士ポイント（3千年前に富士山が大噴火する前の頂上の位置）を通過した線が玉石甌穴へ直角線（90.43）となって到達するための経由点である弥陀の岩屋が定まります。これは図1と同じ状態になります。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	①古富士ポイント	静岡県御殿場市	352100.83	1384425.37	35.350230,138.740380	
経由	②弥陀の岩屋	静岡県賀茂郡南伊豆町手石	343734.24	1385324.33	34.626179,138.890091	90.43
到着	③斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町班島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	

ここでほぼ同時に②弥陀の岩屋から①古富士ポイントを経由して直角線（90.68°）が到達するように沖津宮の位置が定まります。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	②弥陀の岩屋	静岡県賀茂郡南伊豆町手石	343734.24	1385324.33	34.626179,138.890091	
経由	①古富士ポイント	静岡県御殿場市	352100.83	1384425.37	35.350230,138.740380	90.68
到着	⑬沖津宮	福岡県宗像市大島沖ノ島2988	341430.20	1300615.36	34.241723,130.104266	

同じく、①古富士ポイントから⑩筥崎宮を経由して直角線（90.25°）が到達するように沖津宮の位置が定まります。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	①古富士ポイント	静岡県御殿場市	352100.83	1384425.37	35.350230,138.740380	
経由	⑩筥崎宮	福岡市東区箱崎1-22-1	333652.41	1302524.65	33.614557,130.423513	90.25
到着	⑬高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

同じく、古富士ポイントから高千穂峰へ到着する直角線（90.14°）の経由点として中津宮の位置が決まります。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	①古富士ポイント	静岡県御殿場市	352100.83	1384425.37	35.350230,138.740380	
経由	⑫中津宮	福岡県宗像市大島1811	335350.51	1302554.16	33.897365,130.431710	90.14
到着	⑬高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

3.次に、古富士ポイントから高千穂峰へ到着する直角線（90.04°）の経由点として大分八幡宮の位置が定まります。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	②弥陀の岩屋	静岡県賀茂郡南伊豆町手石	343734.24	1385324.33	34.626179,138.890091	
経由	⑨大分八幡宮	福岡県飯塚市大分1272	333504.49	1303731.28	33.584580,130.625355	90.04
到着	⑬高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

5.⑭寺地遺跡から③玉石甌穴へ直角線（90.45°）の到達するための経由点⑩須賀神社（静岡県静岡市駿河区東新田1-16-12）の位置が定まります。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	⑭寺地遺跡	新潟県糸魚川市大字寺地	370130.23	1374834.06	37.025064,137.809461	
経由	⑩須賀神社	静岡県静岡市駿河区東新田1-16-12	345654.21	1382214.12	34.948391,138.370590	90.45
到着	③斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町班島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	

ここで、⑭寺地遺跡は木柱列で線分、神岡坑口ー真脇遺跡（環状木柱列）に対する内角 89.56° のピギーバック点であると同時に、古富士ポイントから桜町遺跡（環状木柱列）へ直角線が 89.67° で到達する経由点でもあります）、図 6 では環状木柱列であるチカモリ遺跡も②ー⑩ー⑦の 90.21° の直角三角形も造り、三大木柱列のすべてが関係しています。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	⑩真脇遺跡	石川県鳳珠郡能登町字真脇	371820.38	1371225.02	37.305660,137.206950	
経由	⑭寺地遺跡	新潟県糸魚川市大字寺地	370130.23	1374834.06	37.025064,137.809461	89.56
到着	⑮神岡坑口	岐阜県飛騨市神岡町和佐保	362100.12	1371849.50	36.350034,137.313749	
出発	⑩桜町遺跡	富山県小矢部市桜町	364117.88	1365209.98	36.688300,136.869440	
経由	⑭寺地遺跡	新潟県糸魚川市大字寺地	370130.23	1374834.06	37.025064,137.809461	89.67
到着	①古富士ポイント	静岡県御殿場市	352100.83	1384425.37	35.350230,138.740380	

5.ここで、ようやく⑩須賀神社から⑪辺津宮を経由して⑨高千穂の峰に直角線（ 89.53° ）が到達するように⑪辺津宮の位置が定まります。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	⑩須賀神社	静岡県静岡市駿河区東新田1-16-12	345654.21	1382214.12	34.948391,138.370590	
経由	⑪宗像大社(辺津宮)	福岡県宗像市田島2331	334951.79	1303051.75	33.831052,130.514376	89.53
到着	⑨高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

ここで不思議なことは、通説で宗像大社（総社）とされている⑪辺津宮の位置が最も後で決まったことです。図 6 からわかるように、⑪辺津宮の位置は⑩須賀神社の位置が定まらなと決めることができません。このような事実はどこにも書かれていません。これ一つを見るだけで、それぞれの神社の由緒や、宇佐神宮の託宣集などの内容はすべて後世の創作であると考えられます。

★軽野神社の真実、軽野（カノ、高速艇）を作った謎の人たち

何よりも驚くことは、九州にある神社の位置が、九州にある玉石甌穴だけでなく、700km 以上も離れた静岡県にある洞窟や山岳の影響を大きく受けて決まっていたことです。しかも図 6 にあるように、⑩須賀神社の位置は北陸にある三大



写真 4 寺地遺跡の木柱列（この形式は他では見つかっていない）

木柱列（ウッドサークル）と上越にある寺地遺跡の四本柱の木柱の位置、さらに神岡坑口（閃亜鉛鉱を産出する鉱山の出入り口、岩石中に亜鉛・鉛・銀を含有）とも関係しています。

これは一体何を意味しているのでしょうか、寺地遺跡の木柱列は写真 4 のように特異な形をしていて、このような例は他にありません。本当に不思議なことです。

何はともあれ。古代の日本（まだ国と呼べる状態ではなかったと思われる）で九州と静岡と人々の行き来があったことは確かなのです。しかも近畿を完全に飛び越えていたのです。もちろん飛行機のない時代ですから船が必要。その船に関して、興味がある記載が

記紀にあります。

応神期（日本書紀）、仁徳期（古事記）に、伊豆国に作らせた「枯野」と名づけられた高速船が老朽化し、その廃材を使って塩を焼いたところ燃え残りがあり、それで琴を作ったら遠く響く音がしたとする記載があります。古代は船を「枯野」と呼んだようです。世界の船の呼び方は「カヌー」「カノア」「カノ」「ワカ」「ワア」「ヴァカ」など色々の呼び方があります。「カノ」は古代日本の船を意味する呼称であったものが中米に伝播し、それがカヌーに訛り、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、それが世界に広がって行ったようです。記紀にある、燃え残った琴を作った船材はレバノン杉かも知れません。

レバノン杉は船材として最も適した材料で、固くて耐水性のある材料です、楽器を作っても良く響く音が出ることが期待されます。レバノン杉はレバノン、シリアなどの高地が原産で船を作る材料として最も適している材料だったので、乱伐によって絶滅したほどです。伊豆は船材に適した楠の集積地であったので、船は楠で作られたことは誰でも考えます。しかし、ここで燃え残った材木は楠より燃えにくかったとしたら、その材料はレバノン杉かもしれません。レバノン杉は日本では生育しない木であることから、この船を持ってきた人たちの生まれが中東であることを物語っている可能性があります。記紀にこのような具体的に船についての記載があるのは伊豆だけです。これは、九州に住み着いた中東から来た



図7 ④軽野神社は規則的な配置、神社群中心の位置にある

人たちが頻りに船で九州と伊豆を行き来しているうちに伊豆に住み着いたことを示しているのかも知れません。狩野川、狩野山（天城山）、豪族の狩野氏、軽野神社など皆その名残の可能性を持っています。軽野神社（静岡県伊豆市松ヶ瀬79）はかつて「カノ」神社と呼んだのでしょう。HSCPで見ると不思議な位置にあります。

③井宮神社は古富士ポイントから②弥陀の岩屋に引いた線分のピギーバック点にあります。この頂点の内角は90.31°です。そこから④軽野神社へ引いた線は89.33°の直角で②弥陀の岩屋に到着します。しかもここでは省略していますが、③井宮神社、④軽野神社の二つは神社群中心の特性を持ち、周辺の神社から引いた直角線の収斂点になっています。

こんなに特異的な神社配置は偶然では決してあり得ません。この神社配置も計画的に行われているのです。軽野神社を作った人たちは中東からきた異人だった可能性があります。写真5はレバノンで無造作に放置され

ている石棺です。日本にある古墳時代の長持石棺と瓜二つです。こんなに良く似ていることも偶然ではあり得ないことです。そうです、鉾石を採掘に来た異人（恐らく中東から来た）が伊豆に住み着いたのです。それが日本の豪族の始まりでしょう。伊豆の豪族であった狩野氏も元を正せばそこに行き当たるはずで。軽野神社はかつて「笠はずし明神」とも呼ばれ、村人はその神威を恐れて神社の前を通るときは笠を外して通ったと言われています。これも、神のようなすばらしい能力の持ち主である異人を恐れていたことの名残に違いありません。



写真5 レバノンにあった石棺

★天孫降臨地が高千穂の峰であった確かな証拠

日本の神話にある天孫降臨は、日本神話において、ニニギの命が、天照大神の神勅を受けて葦原の中つ国を治めるために高天原から日向国の高千穂峰へ天降（あまくだ）ったことです。天孫降臨の地の通説は宮崎県にある高千穂の峰となっていますが、最近はこの否定する意見が多くなっています。一番の問題点は神話にある「日向国の高千穂」の解釈の問題で、「日向」＝宮崎県とすることに問題があり、これが間違っているとする意見が強くなっているのです。

例えば、古代史研究家の古田武彦氏は、この「日向」とはどこだろうとした疑問に対して、日本書紀には「筑紫の日向の高千穂の[木患]触之峯」、古事記では「筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣」とあり、ここにある筑紫とは福岡県のことであり、しかもそれは筑前であると言っているのです。この解釈から日向＝宮崎県ではないと主張し、次の赤字にある強い主張をしています。

【それについて、従来の学者、さらには宮崎・鹿児島両県の地元の人々から大きな非難がおこるかもしれない。しかし、どのようにはげしい罵声を浴びようとも、わたしのなすべきことは一つ。自己の解説のルールを守ることだけだ。これに対して、つぎのような理路をのべる者があるかもしれぬ。その反論の一つ。『古事記』には、九州全体を「筑紫島」といい、その中を四つに分け、その一つに「筑紫国」をあげている。それゆえ、広・狭二つの筑紫があり、ここでは広義の「全九州」ととるべきだ、と。

その通り。それが旧来の理解だった。一部に、ここの筑紫を福岡県ととる論者も出てはいた（原田大六『実在した神話』、門脇禎二『カメラ紀行 筑紫の神話』、伊藤皓文『漢委奴国の起源 ——日本古代国家史論』）。しかし、大勢が宮崎県の日向説をとったのは、右の理路によったのであった（比定地に二説ある。一は南の霧島山。一は北の宮崎県臼杵うすき郡高千穂）。けれども、この本の論証をこれまでたどってきた読者には、もはや明白であろう。この「大筑紫」概念は、『古事記』の編者側の誤認に立つ、「誤置」によるものなのである】

この強い主張に影響されたのか、これまで古田武彦氏と争っていた安本美典氏も天孫降臨地が高千穂峰であることを否定しています。また最近、古代氏族の研究から古代史の謎を明かそうとしている弁護士の本賀寿男氏も「日向」の意味を古田武彦先生と同じように解釈しています。

要するに、最近では皆さんの意見が高千穂峰を否定するのがあたりまえのようになっているのです。その理由の第一は高千穂峰の近辺からそれに相当する遺跡が検出されないこととしています。しかし、これは古代人の地理感がどのようであったかを明確にしないで、議論することに原因があり、しかもその地理感を、現実よりも狭隘に見過ぎているのが原因なのではないでしょうか？

HSCPから見ると、古代人が南は尖閣列島、北は礼文島、また太平洋側は母島まで認識していて、それを神社配置にも応用していたことが明確になっています。この事実を知らずに議論をしていては、大きな間違いを起こすことは避けられないでしょう。

古田武彦氏が先の赤字のように強い勢いで高千穂の峰を否定された背景を調べてみたところ、かつて存在した古代史の研究会会誌「市民の古代」No.21（1992.1.18 発行）に灰塚証明氏が「天降神社群・その他について」の投稿がありました。ここには、全国でも数少ない天降神社が福岡県の糸島に局在して高密度に分布していたとされた内容が書かれていました。「布流多氣」は福岡にあるとしていた古田氏はこの発見に飛びつき、ますます糸島にのめり込んで行った経緯があったようです。

そこで、自分なりに全国の天降神社を調べてみたところ、全国に20社そこそこしかない天降神社が福岡県の糸島地区に8社もあることがわかりました。しかし、天降神社の密度が高いから、そこが天孫降臨地であることはあまりにも性急過ぎます。そこで、HSCPによって高千穂の峰と天降神社の関係を見ってみました。その結果は驚くものでした。

まず、天降神社同士を結んだ直角線で高千穂峰に到達するものはないかを試してみました。天降神社は全国で合わせても二十数社しかありませんから、この試みで高千穂峰に到達する線があれば高千穂峰が天孫降臨地であった可能性が高くなります。幸運なことに、この試みは見事に当たりました。



	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度経度	補正内角 角度
出発	①天降社	長野県木曾郡木祖村藪原607	355628.99	1374713.19	35.941385,137.786998	
経由	②天降神社	福岡県糸島市瀬戸683	333040.90	1301056.60	33.511361,130.182388	89.86
到着	③高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

図8 長野県木曾郡にある天降社から福岡県糸島の天降神社を経由して直角線が89.86°で高千穂峰に到着している

図8は長野県にある①天降社から、福岡県糸島にある②天降神社を経由して89.86°の高い直角精度で③高千穂峰に到達している様子を示したものです。①天降社から②天降社までの距離はおよそ750km、②天降神社から③までの距離は約200kmもあります。このような長い距離をこのような精度を持つように神社を配置した古代人は、まさに神業と言うにふさわしい能力を持っていたことです。そして何よりもこの図は天孫降臨地が③高千穂峰であることをずばりと現しています。

これまで、HSCPを認めようとしなかった人たちは、実際に地図に線を引いたこともなくせに、日本は神社が多いから、適当に線を引けば何かの神社に行き当たるのはあたりまえだなどと言っていました。天降神社は日本では全部探しても二十数社しかありません。ここでは先の戯言は全く通用しません。ここで、また、負け惜しみ・・・絶対に当たらないような確率の宝くじでも当選者はいる・・・それでは宝くじが2回続いて当選したらどのように考えますか？



	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	①天降神社	香川県高松市香川町大野1097	341608.31	1340130.47	34.268974,134.025130	
経由	②天降神社	福岡県古賀市大字薦野1863-1	334400.48	1303121.63	33.733468,130.522674	89.92
到着	③高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

図9 香川県の①天降神社から福岡の天降神社②を経由して89.92°の直角線が高千穂峰に到達している
 図9はさらに直角精度の上がった例です。もうこれを偶然と思う人はいないでしょう。

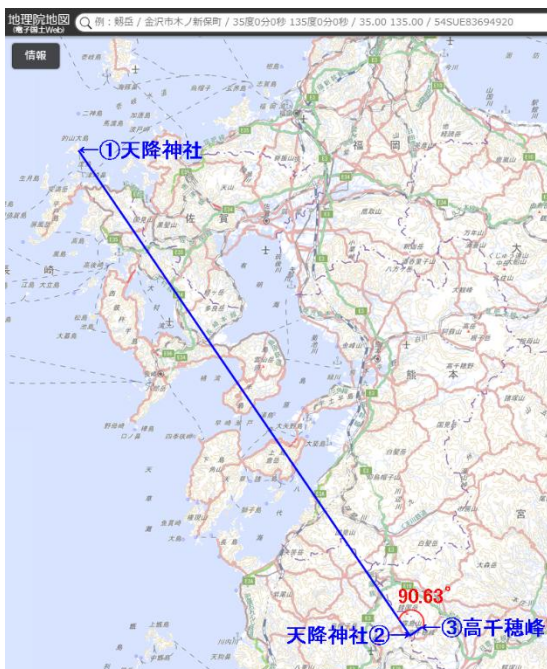


図10 平戸から鹿児島経由で高千穂峰



図11 玉石甌穴から福岡経由で高千穂峰の例

図 10 は長崎県平戸の天降神社から②鹿児島市霧島の天降り神社を經由して 90.63° で③高千穂峰に到達している様子です。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	①天降神社	長崎県平戸市大島村前平1366	332844.12	1293325.00	33.478923,129.556945	
經由	②天降神社	鹿児島県霧島市霧島田口2608-5	315132.23	1305218.41	31.858952,130.871780	90.63
到着	③高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

図 11 は出発地を①玉石甌穴にして經由点を福岡県糸島の天降神社を經由して 89.34° で直角線が③高千穂峰に到着しています。

	ポイント名	住所	緯度 度・分・秒	経度 度・分・秒	10進 緯度,経度	補正内角 度
出発	①斑島玉石甌穴	長崎県北松浦郡小値賀町斑島郷	331243.84	1290131.99	33.212177,129.025553	
經由	②天降神社	福岡県糸島市新田320	333418.33	1301201.23	33.571758,130.200343	89.34
到着	③高千穂峰	宮崎県高原町大字蒲牟田	315310.37	1305508.37	31.886213,130.918992	

ここでは、省略しますが、玉石甌穴から經由点になる神社を經由して高千穂峰に到達する例はまだたくさんあります。その經由点となる神社の多くはニニギに関係する祭神となっている例が多く、神話との一致もあります。このように、まだ明確な証拠はたくさんありますが、今回はここで終わります。

ここまでくればもう、高千穂の峰を天孫降臨地ではないと言う人はいないでしょう。これまでの古代史は、文献に頼るものが多く、その古文書の真の意味を理解することが重要でした。しかし、いくら良く理解したからと言っても、その文書のすべてが正しいとは限りません。文献に嘘や現実でないものが描かれていることが多いので、いくら理解しても限界がありました。そんなこともあり、古代史の議論は、どうせ決定的な証拠は出てこないことを承知していて、敢えてこれまでと異なる説を無理して説き、注目を浴びようとする嫌いもありました。それは天孫降臨地の議論もその傾向が強かったのではないかと考えています。結果は通説の勝ちで著名な研究者の多くは敗北する結果になりました。神社の配置から古代を推定する方法は、現存する神社の位置そのものを利用するので、古文書のように嘘の記載にだまされることがありません。また、数値を使った確率論で議論することができるので、その確からしさを知ることも可能です。

★おわりに

今回は大発見が続きました。特に、古代の祭祀は九州と伊豆や北陸から始まり、当初は近畿を飛び越えていたことです。これは、古代は船による移動が最も重要で、海岸は自然の港を利用することが多く、周辺に湾や島が多くある場所が好まれたのでしょう。しかし、蒙古襲来などの大事件を契機に、海岸は他国から攻められたときに不利であることがわかり、国の中枢部分は海から離れた内陸に持って行くようになったに違いありません。河川の整備が進むと内陸でも船便は安全で便利になり、自然地形を利用した港よりも栄えるようになったのです。そうしたことを考慮すると古代に近畿を飛び越えて祭祀が行われても不思議ではないのです。現在ある姿から、過去を類推することの難しさがそこにあるのですが、それに気付かない人が多いようです。

また、天孫降臨地については劇的に明確な証拠を得る結果となりました。ここで重要だった天降神社は古田武彦氏が、天孫降臨地が福岡の糸島周辺であると誤認する要因となった神社です。この天降神社が逆に古田説を否定する材料となったことになり、とても皮肉な結果になってしまいました。古田氏が生存されていたとしたら、如何なる弁明をするのでしょうか？